

Deasy プロジェクト勉強会の開催概要（第3回）

国土交通省下水道部では、全ての人が、その人らしく快適で、環境に配慮した暮らし方ができるために、“オムツ（Diaper）をより容易（easy）に扱える”というビジョンのもとで「Deasy プロジェクト」を進めています。今年度は、排泄にかかわる今後の行動について業界の垣根を越えて実際の行動を移すことを目的とした会議「Deasy Conference Vol.2」を2月4日に開催します。2月の会議の前に排泄にかかわる紙オムツの素材メーカー、トイレ・住機器メーカー、学識者、行政関係者などが参加する「勉強会」を3回開催し、従来の排泄ケアの概念から抜け出した未来のあるべき姿を皆で話し合います。

第3回（最終回）の勉強会が1月9日、東京都渋谷区のロフトワークで開催されました。そのもようを報告します。

第3回のテーマは、「これからの自分らしい生き方を支える紙オムツのあり方」。はじめに日本科学未来館の伊達雄亮・科学コミュニケーターの指導のもと、紙オムツの解剖を体験し、紙オムツの成分や構造について理解を深めました。続いて参加者全員でワークショップを行い、第1～2回の勉強会でインプットして共有された排泄をめぐる課題に対し、実現させたいソリューションや新たなビジネスモデルを話し合いました。

紙オムツの解剖を体験

今回、紙オムツの解剖にあたって用意したのは、女性の生理用品などに使われる比較的小さめの“パットタイプ”、通常サイズの“パンツタイプ”、介護などの用途で使われる大きめの“テープタイプ”の3種類。伊達さんは「成分や構造はどれも同じ」「パルプ（植物繊維）以外は全てプラスチックでできている」「紙オムツは様々な種類のプラスチックを混ぜているためリサイクルしにくい」など、紙オムツの基本的な仕組みについて説明しつつ、解剖を実演しました。

まず、モレ防止のために付いているギャザーをはがし、オムツ全体にコールドスプレーを吹き付けます。冷却することで接着剤が固まり、素材をはがれやすくなるからです。次に表面の柔らかい不織布をはがします。すると、パルプとポリマー（高分子吸収剤）で構成された層が現れます。ここに青に着色した水を吹きかけると、水を吸収したポリマーが大きくなって浮かび上がることが目で確認できます。

伊達さんが実演した手順を参考に、参加者も紙オムツの解剖に取り組みました。参加者から

は「こんなに簡単に分解できるとは思わなかった」「紙オムツにこれほど多くのパルプが使われているとは知らなかった」「尿が付かない部分もありそうで、パルプがもったいない気がする」などの声が聞かれました。



排泄をめぐる新たなビジネスモデルを議論

ワークショップでは、「60代のアクティブシニア」「義母を介護する女性」「介護されている高齢者」など、いくつかのペルソナ（架空の人物像）が設定され、その中から各人が自由に選んだペルソナについて、抱える課題や、その解決に必要なアイデアを考える「アイデア・スケッチ」が行われました。

「資源循環を意識したオムツなど、付けることに抵抗のないカッコいいオムツ」「排泄に関する情報を与えてくれるステーションのような場所」「介護者、被介護者、配偶者などと情報を共有できるアプリ」「寝たきりでも、運動をしたような感覚を得られる装置」など、様々なアイデアが提案されました。

続けて、出されたアイデアをもとに、参加者がA班、B班の2班に分かれ、排泄をめぐる新たなビジネスモデルについて意見が交わされました。そして、各班の発表を通じ、議論のプロセスと成果が共有されました。

漏れた尿を健康の測定や分析に使うという発想

A班は、“サーキュラー・エコノミー（循環型経済）”の実現に向け、紙オムツのユーザー、廃棄物回収業者、材料メーカー、紙オムツメーカーなど、様々な立場の人たちが皆、利益やメリットを享受できる好循環なサイクルの仕組みを考えました。

その一環で、ふいに漏れた尿を回収し、医療機関や製薬メーカーなどに提供することで健康状態の測定や分析につなげられないかという発想もうまれました。尿の測定・分析結果や、それらをもとに開発・改良した医薬品を紙オムツユーザーに還元するという新たなサービスです。こうしたサービスが実現すれば、ユーザーはもちろん、例えば材料メーカーでも、いかに尿を

